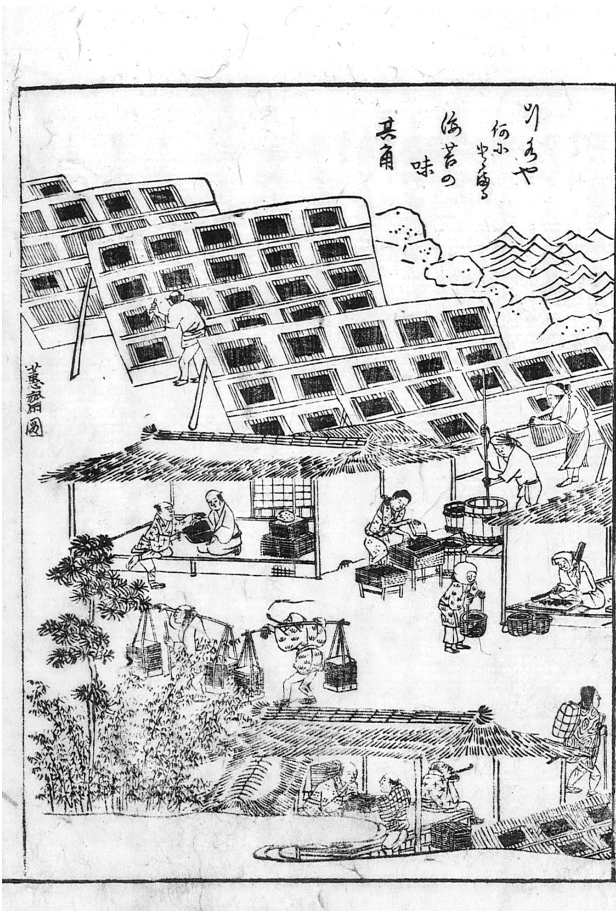
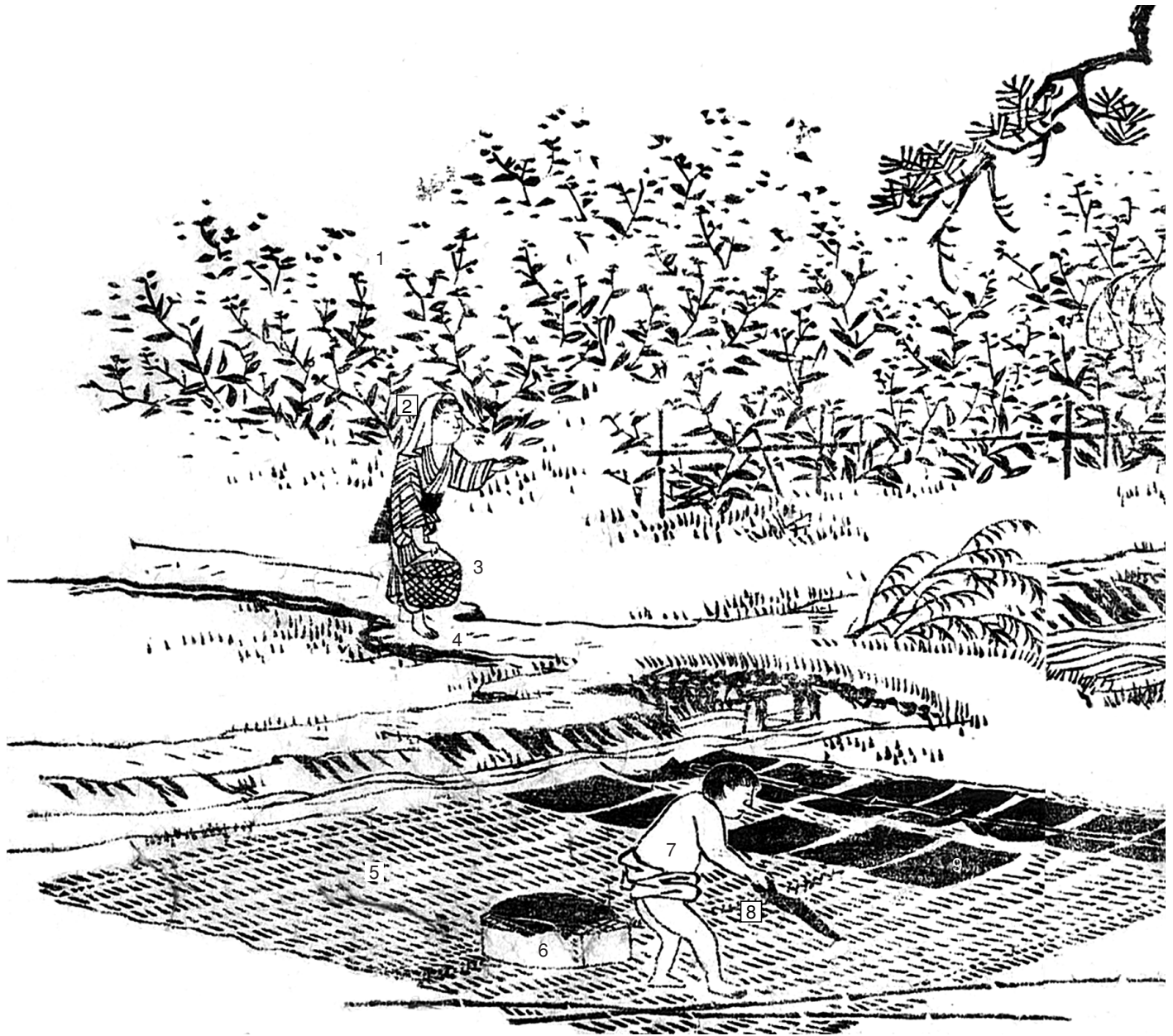


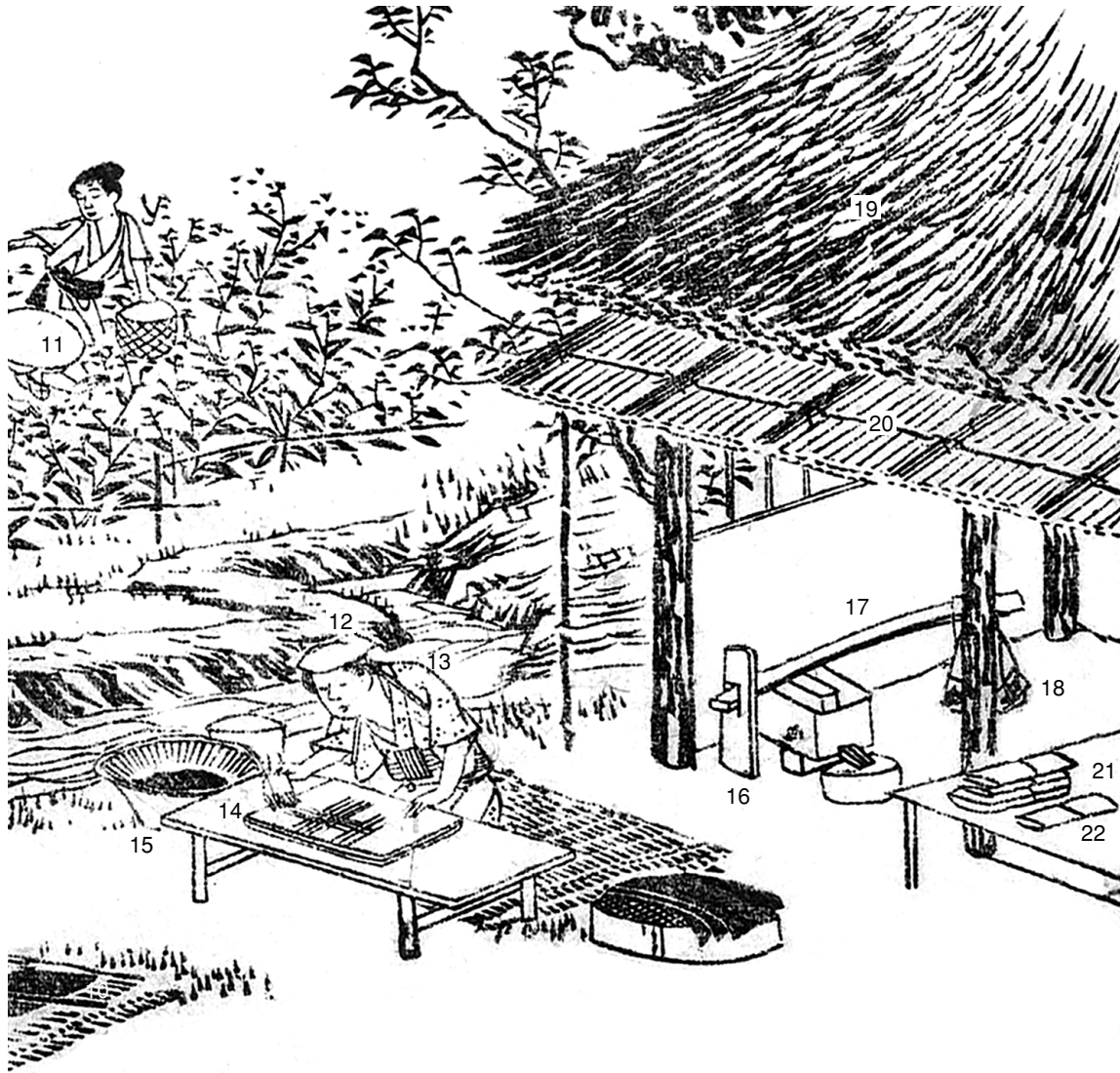
さまざまな生業



20 草津の青花紙



- | | |
|-----------|-------------|
| 1 青花 | 12 姉さんかぶり |
| 2 手拭いを被る | 13 襷掛け |
| 3 籠 | 14 刷毛 |
| 4 裸足 | 15 摺鉢 |
| 5 筵 | 16 絞り器 |
| 6 曲げ物 | 17 締め木 |
| 7 上半身裸 | 18 重石 |
| 8 染めた紙をほす | 19 草屋根 |
| 9 青花紙 | 20 庇 |
| 10 竹棹 | 21 縁台 |
| 11 菅笠 | 22 包装された青花紙 |

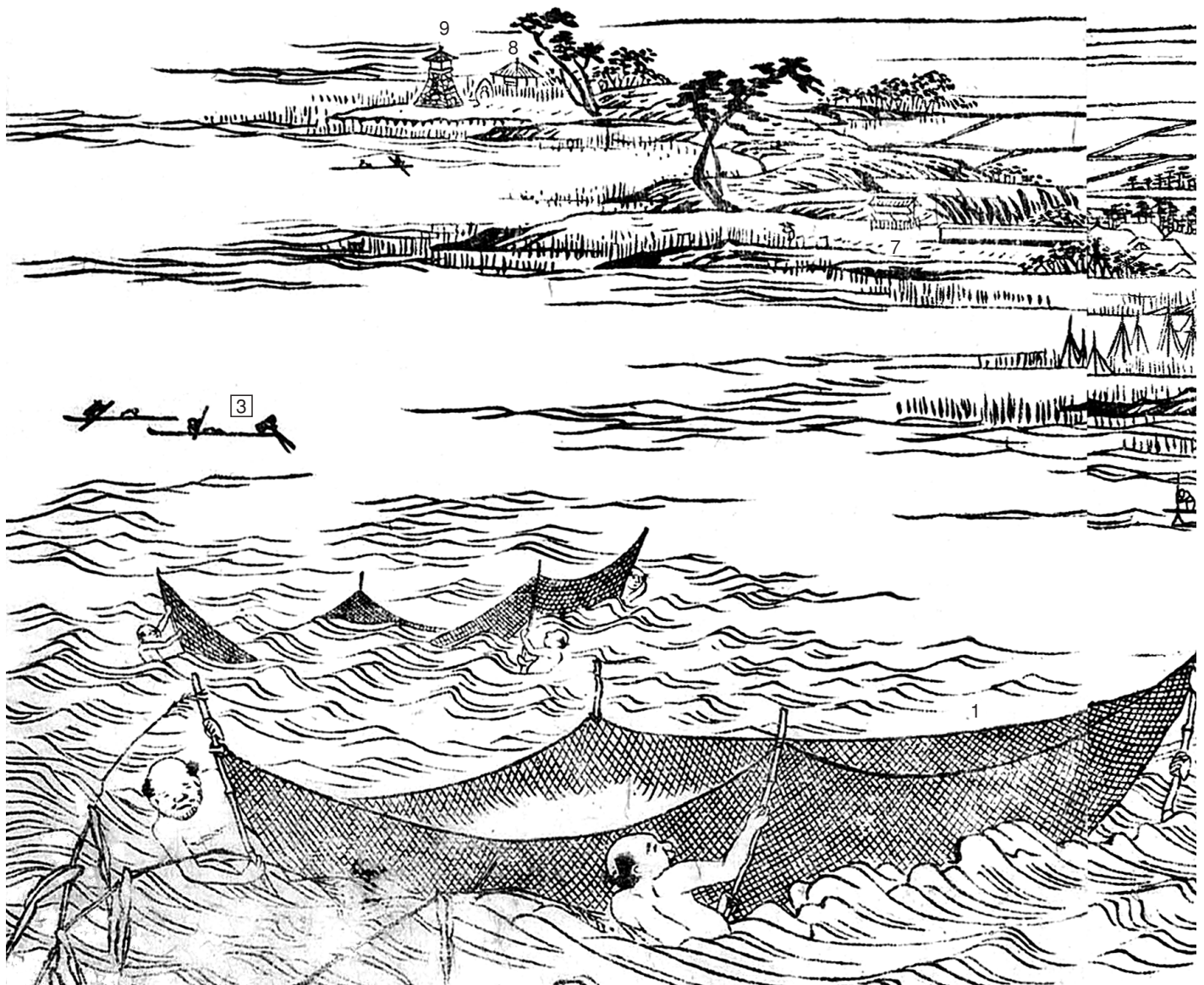


10

青花は露草の変種で、露草に比較して背丈が高い。青花は当時草津（現滋賀県草津市）周辺の特産で、花から搾り取った藍色の液を紙に染みこませて、京都の友禅染の下絵材料に用いた。図は上部に青花栽培の様子を描き、下に型紙用紙の製造過程を描く。青花の栽培は旧暦の6月から7月という真夏の暑い盛りであった。2人の女性が畑の中に入って花をつみ取っている。野良道には詰め取った花を入れた籠

を家に運んでいる女性がいる。仕事場に運ばれた青花は、絞り器に掛けられて汁が搾り取られる。絞り器は梃子の原理を利用して、重石を反対側に吊して、その力で圧搾するものである。絞られた汁は、家の前で女性が紙に刷毛で塗っている。これを庭先で男性が一枚ずつ広げ、風で飛ばされないように棹で押さえて、乾燥させている。乾燥すれば製品として完成である。（福田）

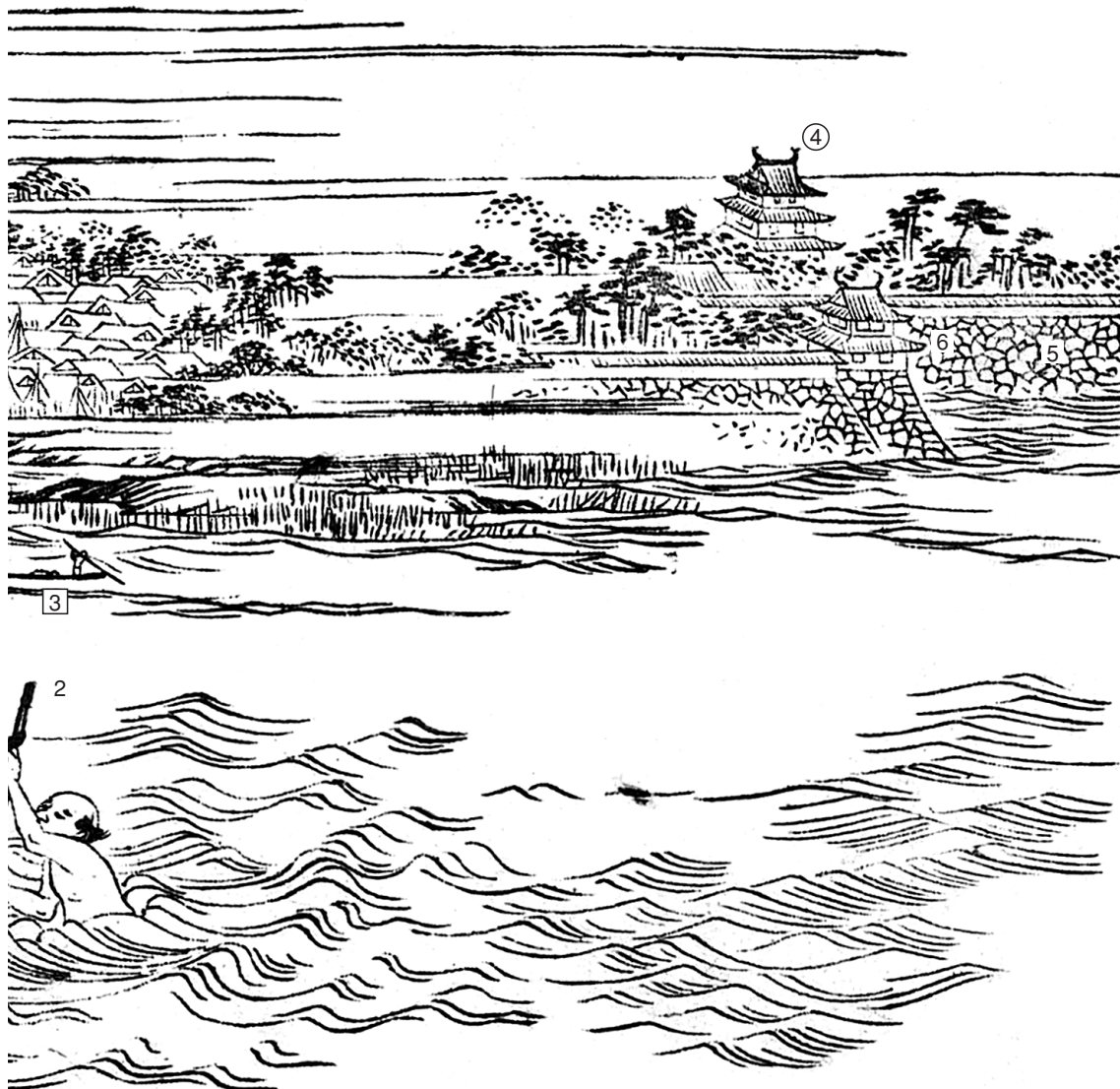
21 桑名の海



桑名（現三重県桑名市）沿岸での漁のようすを描く。詞書には「冬より春に至るまで白魚を漁する事多し」と、この地の名産のひとつである白魚について書かれているが、絵に描かれている網漁は、鵜狩網、地方名で七人網ともよばれる網を使った、イナ（ボラの稚魚）漁のようすである。鵜狩網は六角形で、前の2角に6尺の竹棹の端を付け、左右に自在に動くようにしてあり、後方は、隣接する2角を長い竹棹で結んである。

絵では棹を持つ3人の漁師が描かれているが、計4本の竹棹を4人～6人で操作したようである。漁師達はまず小船に8～10人が乗って、水深2～3尺の浅瀬で網とこれを操作する漁師を降ろす。その後、船は1町ばかり沖に出て、鵜縄という浮子木をたくさんつけた長い縄を張りながら、魚を網に追い込むのである（財団法人東海水産科学協会・海の博物館編『合冊三重県水産図解』、同編『印影三重県水産図説』）。ただし構図の関係からか、この絵では鵜縄

- 1 鵜狩網（三重県水産図説）
- 2 竹棹
- ③ 貝を採る
- ④ 桑名城
- 5 石垣
- 6 櫓
- 7 高札場
- 8 赤須賀地蔵尊
- 9 常燈明

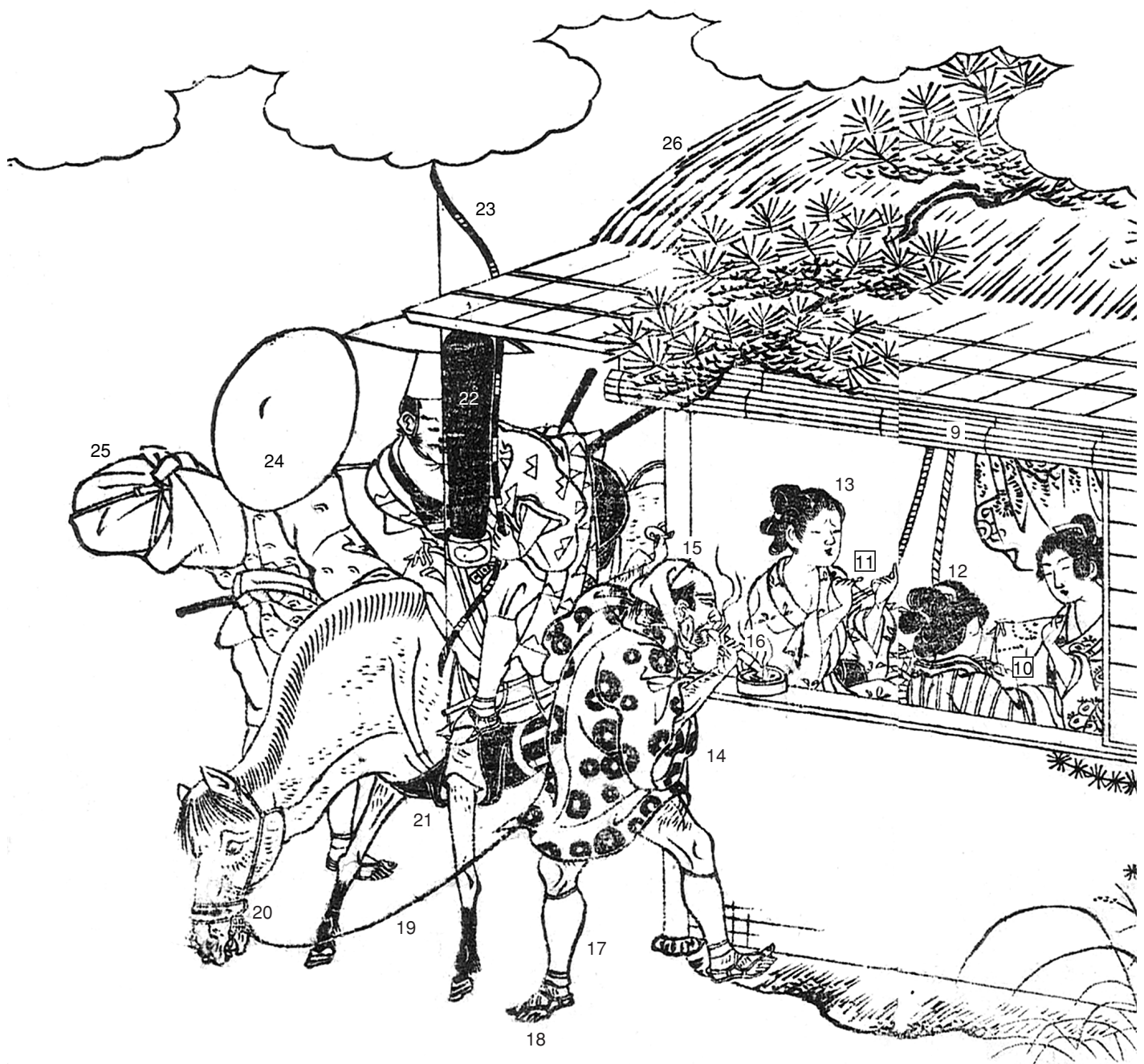


のようすは描かれていない。鵜狩網は、桑名の赤須賀のほか、松坂の松浦、伊勢の大湊といった漁村にあったようだ。イナの漁期は4月下旬から10月下旬で、8～9月が最盛期とされる。

いっぽうで、この網漁のはるか遠景に描かれているのは、小船をあやつる貝漁のようすである。この地域の名産である蛤であろうか。詞書には「蛤は秋八月の初めより取る。時雨する頃を美味とす」とあり、その漁期から「時雨蛤」の名称で知られるよう

になったことが本文にも補足されている。イナの漁期とも合致するので、この挿絵全体が、初秋の桑名沿岸の風景をとらえているとも考えられる。本文に、これらの漁に携わる漁村として記載されている赤須賀村は、遠景の桑名城の左方向に続く陸地あたりであろう。赤須賀にあった地蔵尊と常燈明とが描かれている。常燈明は、本文に「夜走渡海廻船の極とす。宝暦年中より始まる」とあるとおり、この沖を行く渡船の目印となっていた。(山本)

22 有松絞



尾州有松村（現名古屋市長区有松町）の名産「有松絞」の作業風景を描く。有松絞の絵は、広重の「東海道五十三次」や『尾張名所図会』などにも描かれているが、いずれも製品を扱う店舗を画題としているのに対し、こちらでは製品になるまでの作業風景を取り上げている。草屋根の家の窓から見える3人は、左の女性が巻き上げという絞加工の作業中、

右端は絞り模様をつけるために平縫いしているところであろう。染色工程はここには示されていないが、右端では染め上がった細い布を天日干ししている。中剃りの髪型なので、まだ子どもであろう。家内工業として、女性や子どもが労働に従事しているようすがうかがえる。

『尾張名所図会』には、有松絞がこの地の産業と



- 1 染地
- 2 布を乾す
- 3 棹
- 4 中剃り (守貞)
- 5 前垂れ (守貞)
- 6 草履
- 7 桶
- 8 障子
- 9 簾
- 10 模様を平縫いする
- 11 巻き上げる
- 12 櫛
- 13 眉を剃った女性
- 14 馬子
- 15 頬被り (膝栗毛)
- 16 煙管
- 17 脚絆
- 18 草鞋
- 19 手綱
- 20 轡
- 21 腹掛け
- 22 矢籠 (和漢)
- 23 弓
- 24 笠
- 25 風呂敷包み
- 26 草屋根

なった由来が記されている。それによると、慶長年間に郡内の英比庄から竹田庄九郎という人物がやってきて店を出したのが始まりと伝えられている。その後数十軒もの店ができたが、とくにこの竹田家にはさまざまな武家や公家、旅の途中の蘭人や琉球人までもが立ち寄り、絞り染めの布を買い求めたという。同書の挿絵は、竹田家の立派な店構えを描いて

いる。いっぽう本書では、詞書に、木綿絞の職で病身の両親を助けた大坂の11歳の少女の逸話が紹介されている。この少女は15歳のときに白銀20枚の褒美を授かったとある。こうした孝女の働きを紹介することが、家内工業の奨励にもなったのであろうか。(山本)

23 池鯉鮒の馬市

- 1 松
- 2 馬
- 3 脚絆
- 4 羽織
- 5 袖の中での売値交渉
- 6 頬被り
- 7 頭巾
- 8 行李
- 9 菅笠
- 10 あぐらをかく（膝栗毛）
- 11 合羽（守貞）
- 12 盃
- 13 ひょうたん
- 14 縁台
- 15 釜
- 16 竈（守貞）
- 17 庖丁
- 18 笠
- 19 莫蔭
- 20 籠



池鯉鮒宿（現愛知県知立市）の東の野原で開かれた馬市の様子を描く。この野原は「引馬野^{ひくまの}」の地名でもよばれていて、本文によれば、毎年4月25日から5月5日まで、400～500頭もの馬と、馬口^{ばくろう}や^{うまかい}牧養らが集まり、競りが行われたらしい。「馬の値を極むるを談合松といふ」とあるとおり、野にある松の木を目印に、ここに馬をつないで値段交渉をしたようだ。絵には、馬をつなぐ松の木と、そのそばに集まった博勞たちが、袖の中に互いの腕をいれて、値段の交渉をしているようすが描かれている。これ

については、文政年間に星橋楼長雄による狂歌集『秋葉みちの記』に、「池鯉鮒の駅」として「ふところへこそくるやうに手をいれてちりふのさにとつとふ馬市」と詠んだ描写もある（知立市史編纂委員会編『知立市史下巻』所収、1979）。

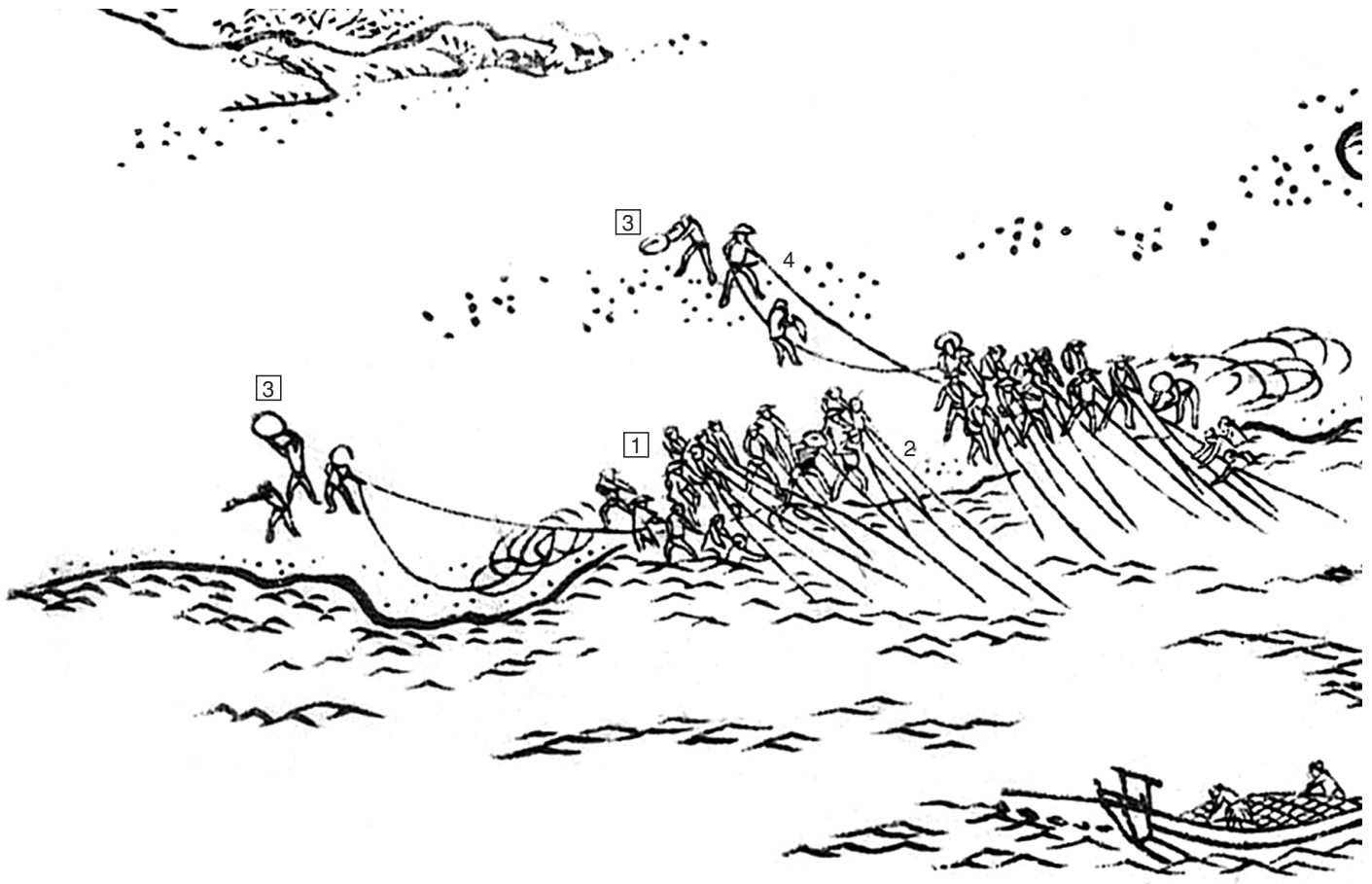
池鯉鮒の馬市は『知立市史上巻』（知立市史編纂委員会編、1976）によれば、鎌倉時代あたりから行われていたようである。江戸時代になると、『東海道名所記』万治4年（1661）頃や、『富士一覽記』（17世紀末～18世紀初め頃）などにも描写がみられ、



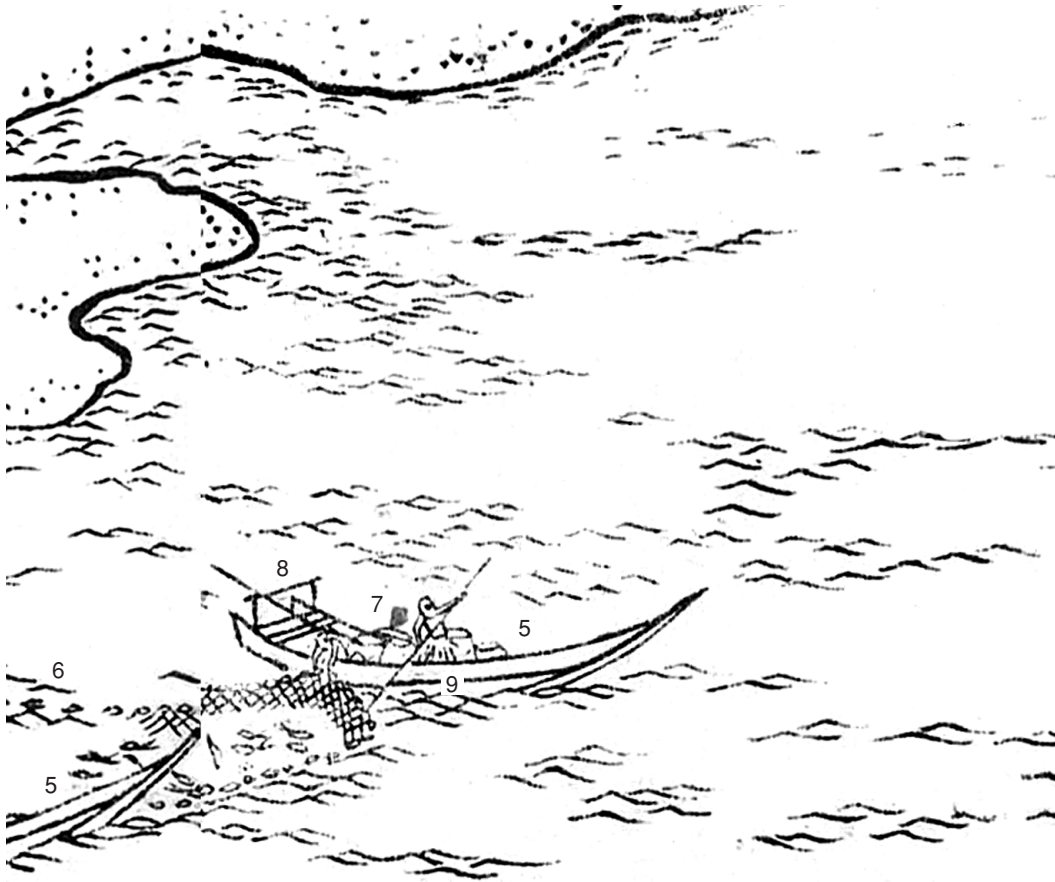
それらには、甲斐や信濃のあたりからも馬が集められていたこと、商人や遊女、傀儡子までもが集まって、たいへんな賑わいであったことが記されている。この絵では、右側に縁台と竈を据えただけの簡単な茶店が描かれている。竈にかかっている釜からのぞいているのは、田楽の串だろうか。店の主人らしき男が、ひょうたんの酒を縁台の客に注いでいる。なお、この縁台に腰掛ける男たちは、真ん中の男は両足を上げておるもの、両端のふたりは片足だけ草鞋を脱ぎ、もう片方はそのまま下ろしている。こう

したスタイルをいずれも「あぐら」と呼んでいたようすは、『東海道中膝栗毛』の描写にもうかがえる。茶店の右には、莫産を敷いた物売りの姿。近隣の農家から売りに来ているのであろうか、籠いっぱい品を広げて売っている。これに庖丁をあてている客のようすからみると、果実のようである。池鯉鮒の馬市は、明治の末頃まで開かれていた。(山本)

24 駿河湾の地曳網漁



- 1 地曳網を曳く
- 2 引網（日本水産捕採誌）
- 3 笠を振って合図する
- 4 禰（守貞）
- 5 網船（明治前日本漁業技術史）
- 6 浮子
- 7 魚籠
- 8 櫓
- 9 腰蓑



一本松新田（現静岡県沼津市）の地曳網漁の姿である。地曳網は袋網とその両端についた袖網と引綱からなり、引綱を曳いて魚を袋網に追い込んで漁獲する漁法であるが、ここでも2艘の網舟が魚を網に追い込み、岸では大勢の人々が二手に分かれ引綱を曳いて魚を浜まで曳き寄せている姿が描かれている。それぞれの引綱の先頭には、調子を揃えて一斉に網を曳くために笠らしきものを振って合図する者がおり、網を曳く者は禪のみであるが、船上で網を扱う者は腰蓑をつけていることが見える。また、こ

の図からは読み取れないが、詞書の「この辺みな漁家にて、初下の初夏の頃は、大網を地引きして鰹を漁すること多し」からは、鰹の地曳であることが推測できよう。また、「大地曳ハ寛文六年に創設……船一艘ニテ使用スルモノニシテ不便ナリシガ降りて明和四年……二艘ニテ使用スル事に改良セリ」との記録があり、一本松新田での地曳網の始まりと1艘の網舟から進化して2艘の網舟になったことを知ることができる（『静岡県水産誌』）。（中村）

25 大森の麦わら細工店



- 1 杖
- 2 菅笠
- ③ 天秤棒を担ぐ
- 4 ひょうたん
- 5 人形
- 6 麦わら細工・馬
- 7 向う鉢巻
- 8 唐人らっぱ
- 9 股引
- 10 縁台
- 11 草鞋
- 12 笠
- 13 麦わら細工・唐人笛
- 14 麦わら細工・宝船
- 15 麦わら細工・箱
- 16 麦わら細工・虎
- ⑦ おもちゃをねだる
- 18 羽織
- 19 鞭（和漢）
- 20 尻からげ（嬉遊）
- 21 脚絆
- 22 鐘
- 23 鞍
- 24 陣笠
- ⑤ 刀を担ぐ
- 26 「麦ハラ細工店」

大森（現東京都大田区）の麦わら細工は名物で、赤・青・藍・黄・黒などの原色に染め上げた麦わらをたて割りにし、箱の表面に貼り付けて幾何学文様や花鳥などを形作った「張り細工」、木刀に貼り付け青龍刀のように形作った玩具、長い麦わらで虎や馬などの動物・でんでん太鼓・唐人笛・虫カゴなどを編み上げた「編み細工」があった（大田区立郷土博物館『麦わら細工の輝き』）。図中でも店内に虎・宝船・笠など、大型の麦わら細工が見える。左側には多角形の箱に模様を張り込んだ箱物細工が並べられ、女性店員が親子に見せている。唐人らっぱを吹く父子が描かれ、実際に音の出る玩具であったことが分かる。

賑わう店の前を、馬に乗った侍と従者が駆け抜け、街道を行く人々を驚かせている。当時は西洋式の蹄鉄は伝来しておらず、馬も草鞋を履いていた。追いかける従者も、馬の速度についていくため、刀に小型の荷をつけただけの軽装である。（富澤）

26 大森の海苔採取

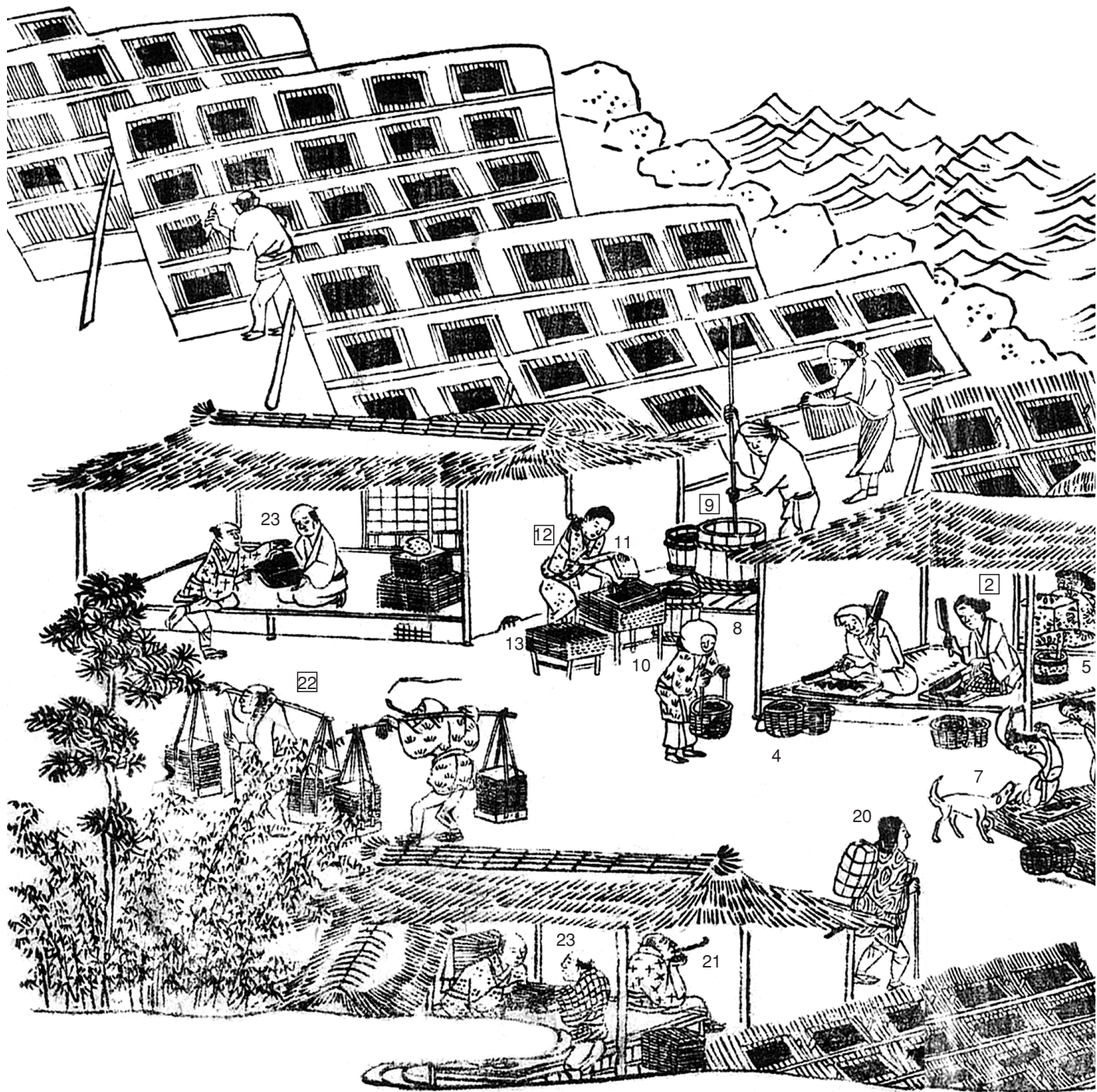
- 1 海苔ヒビ (広益)
- 2 海苔とり網
- 3 海苔とり笊
- 4 赤子を負ぶう
- 5 向う鉢巻き
- 6 手甲
- 7 頬被り
- 8 わら帽子
- 9 ちゃんちゃんこ
- 10 息で手を暖める
- 11 ベカ舟
- 12 櫂
- 13 肩を刺った女性
- 14 笊から漏れる海苔をすくう



海苔栽培の様子を近景で描く。海苔の栽培は、浅瀬にナラやケヤキなどの木の枝で作ったヒビと呼ばれる養殖具を刺し並べて行った。潮が踵のあたりまで退いたところを見計らって、大人数での海苔採り作業が行われている。深いところでは、ベカ船で作業している。厳冬期の海苔は品質がよく、高値で売れたが、寒中の海で行う作業は厳しいものであった。寒風に海面が波立つ様子が、流線で表現されている。海苔採り作業は素手で行われ、かじかんだ指を息で暖めている女性の姿も見える。わずかな海苔も採り残すまいと、笊ざるの水を切る際に流れ出る海苔や、海中に漂う海苔を網ですくい取っている。働く女性たちは被りものをしていないが、男女の差を描き分けるための演出とも考えられる (大田区立郷土博物館『大田区海苔物語』)。(富澤)



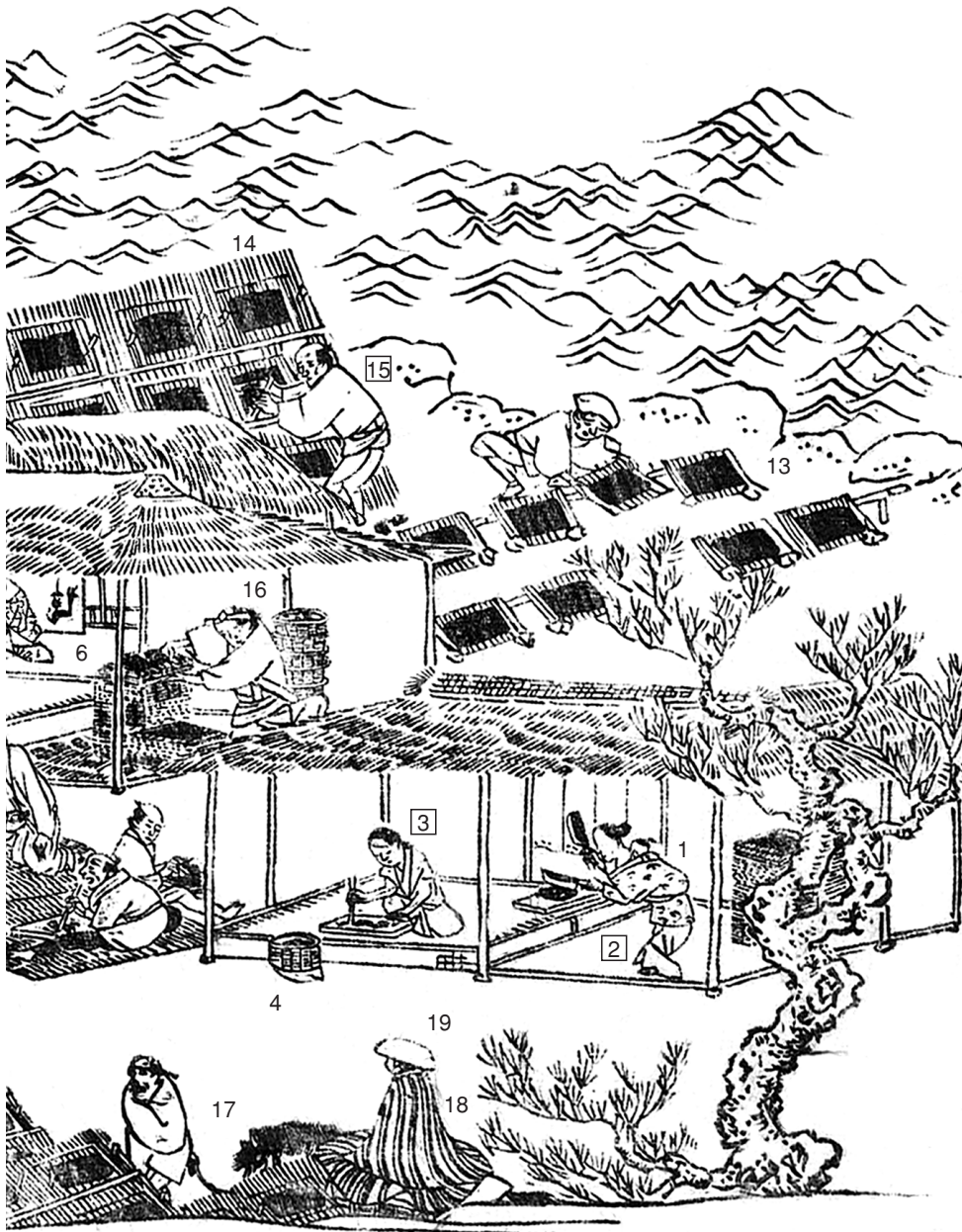
27 大森の海苔作り



大森の海苔作りの一連の行程を描く。日中摘んだ生海苔は傷みやすいため、加工作業は深夜から行われた。まず生海苔を、両手で持った海苔切り庖丁で細かく裁断し、ゴミを箸で取り除いていく。つぎに四斗樽に水と裁断した海苔を混ぜ、升ですくい簀の上に置いた付け枠の中へ素早く流し込んで、四角い

海苔を作る（海苔付け）。水が引き切らぬうちに揺すり、簀に均一に広げるのがコツであった。水を切った海苔簀は、まず裏側から乾かしメグシで留めておく。天気がよければ昼過ぎには乾くので、簾から海苔を剥がして10枚ごとに束ねて出荷を待った。厳寒期の海苔が最も質が良く、珍重され高値で売れ

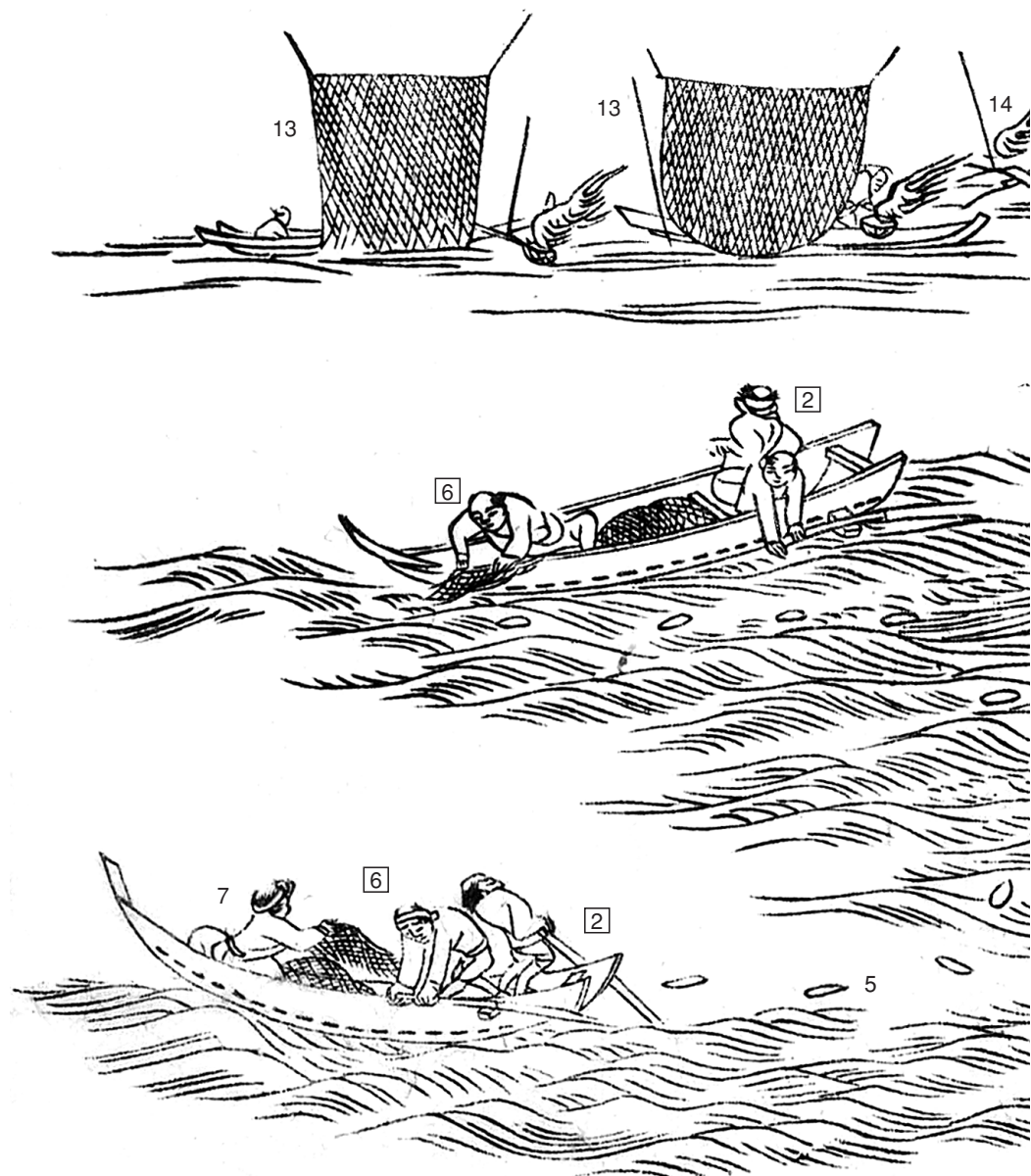
- 1 ねんねこ半てん
- 2 海苔切り庖丁で刻む
- 3 箸でゴミを取る
- 4 海苔洗い籠
- 5 火鉢
- 6 こたつ
- 7 犬
- 8 四斗樽〈ツケダル〉
- 9 裁断した海苔を水と混ぜる
- 10 付け枠
- 11 升
- 12 海苔付け
- 13 海苔簀
- 14 乾し台
- 15 メグシでとめる
- 16 海苔剥がし
- 17 馬子
- 18 合羽（守貞）
- 19 菅笠
- 20 修験者
- 21 煙管
- 22 天秤棒を担ぐ
- 23 海苔の商談



だが、寒中での作業は厳しいものであった。実際は冬の寒さを防ぐため、作業小屋には戸があったはずだが、本図では屋内の作業を描くため省略されているようである。(富澤)

28 江戸湾の漁業

- 1 投網を打つ
- 2 二挺櫓で船を操る
- 3 腰蓑
- 4 漁船〈猪牙船〉
- 5 浮子
- 6 巻き網を仕掛ける
- 7 鉢巻
- 8 魚を突く
- 9 菅笠
- 10 尻からげ（嬉遊）
- 11 釣り船〈猪牙船〉
- 12 手拭いを被る
- 13 四つ手網
- 14 漁火
- 15 ウミウ
- 16 禪（守貞）
- 17 釣り竿



江戸湾は豊富な魚種に恵まれており、漁業が盛んであった。本図は芝浦付近でのさまざまな漁業の様子を描いている。画面中央では投網漁、その左側では2艘の漁船による巻き網漁が行われている。漁船は後部両側から櫓で操船ができる仕組みになっている。画面右では、尻からげにした3人の男たちが、膝までつかる程度の浅瀬で漁を行っている。なか

かの大物をしとめ、エラを通して魚を束ねている。2艘の遊漁船で釣りを楽しんでいる男たちは服装から判断して、町人であろう。生業としての漁業だけでなく、レジャーとしての釣りも盛んであったことを窺わせる。遠景には四つ手網を使った火振漁が描かれる。沈めた四つ手網の上で漁火を焚き、魚が集まってきたところで引き上げた。（富澤）

